


2021-2022年 世界YWCA



世界で活躍する
若い女性リーダー
たちの物語

2021年：変革を勇気づけるリーダーを目指して

2022年：熱き行動をリードする女性たち



WorldYWCA

世界YWCA

『世界で活躍する若い女性リーダーたちの物語』 日本語版について

この日本語版冊子は、世界YWCAが各国でYWCA運動に関わって活動する女性リーダーたちのストーリーを綴って発行した

- 『Aspiring Leaders Inspiring Change（変革を勇気づけるリーダーを目指して）』（2021）
- 『Inspiring Leaders Aspiring Action（熱き行動をリードする女性たち）』（2022）

を1冊にまとめたものです。

日本語版作成にあたっては東京YWCA国際語学ボランティアズILVの皆さんが翻訳をご担当くださいました。ここに感謝を申し上げます。

2023年7月 日本YWCA

日本YWCAについて

YWCA（ワイ・ダブリュ・シー・エー/Young Women's Christian Association）は、キリスト教を基盤に、世界中の女性が言語や文化の壁を越えて力を合わせ、女性の社会参画を進め、人権や健康や環境が守られる平和な世界を実現する国際NGOです。1855年英国で始まり、今では日本を含む100以上の国・地域で活動しています。日本では、24の地域YWCAと37の中学・高等学校YWCAが活動しています。

問い合わせ先：

〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台1-8-11東京YWCA会館302号室
Tel：(03) 3292-6121 Fax：(03) 3292-6122
Email:office-japan@ywca.or.jp
電話受付時間：平日9:30-18:30 土・日・祝日は休み



www.ywca.or.jp



@ywcajapan



2021年

変革を勇気づける

リーダーを目指して

世界YWCAについて

世界YWCAは女性の権利を求めて活動する世界規模の組織です。毎年、世界各地で文化や信条を超えた何百万人もの女性、若い女性、少女たちが参加しており、人々の生活と世界を良い方向へ変革することを目指しています。100以上の国に拠点を置く私たちの運動は、草の根型で、地域社会を基盤とし、変革をもたらす女性の力に根差したものです。女性、若い女性、少女たちが自分たちの権利を守り自分たちの地域社会に影響を与えるだけでなく、仲間の女性を同様の運動へと奮い立たせるようなリーダーや変革者になれるように、サポートと機会を提供しています。

世界YWCAは、女性や若い女性のリーダーたちの世代を超えた強力なネットワーク作りに取り組んでいます。女性・若い女性たちが、自身が地域社会で経験する特有のニーズに応じて自ら主導し、女性・若い女性たちのためのプログラムを構築することでそれを実現しようとしています。

この冊子は、集められたストーリーを世界YWCAが協働作業によりまとめて作成したものです。
世界YWCA はアリヨナ・プリビデンツェワAlyona Prividienstseva (ウクライナ)、
フェイス・サカラFaith Sakala (アフリカ)、ゴハル・アスリキヤンGohar Aslikyan (アルメニア)、
イザベル・バンディIsabelle Voundi (カメルーン)、コサリナ・ヴィグナラジャKosalina Vignarajah (スリランカ)、
リディア・アルマウ・アラムレウLidya Almaw Alamrew (エチオピア)、
マルラ・メイ・バエスMarla May Baes (フィリピン)、
モーリーン・アティエノ・マガクMaureen Atieno Magak (ケニア)、マヨワ・オ・オニーオリサン
Mayowa Oluwatoyin Oni-orisan (ナイジェリア)、
ナムラタ・シャルマ Namrata Sharma (インド)、菜々子Nanako (日本)、
レナタ・グレンボツカヤRenata Glembotskaya (ベラルーシ)、
ロニ・シャキヤRoni Shakya (ネパール)、サシャ・ソコロワSasha Sokolova (ベラルーシ)、
タナ・アリアイTana Aliaj (アルバニア)のみなさんに感謝申し上げます。
この作業を円滑に進めてくださったジル・アナミ Jill Anami さん(アフリカ担当)、
ベラ・シロクバシュVera Syrokvash さん(東ヨーロッパ担当)、ニルマラ・グルンNirmala Gurung
さん(アジア担当)にも心より感謝申し上げます。

冊子作成：Udita Chaturvedi

デザインとグラフィックス：Tiffinbox

この冊子はフィンランド政府外務省の助成金(2018-2020)を受けています。



アトリビューション—非営利—改変禁止 4.0国際 (CC BY-NC-ND 4.0)



www.creativecommons.org

世界YWCAのクレジット(名称、タイトル等)を表示し、かつ非営利目的であり、そして原文を
改変しないことを主条件とし、再配布することができます。世界YWCA 2021年出版

世界YWCAについては公式ウェブ
サイトをご覧ください

www.worldywca.org

寄付を募集しています

公式SNSをフォローしてください



はじめに

この冊子は、性と生殖に関する健康と権利(Sexual and reproductive health and rights: SRHR) とメンタルヘルスにかかわる取り組みにおいて、アジア、アフリカ、東ヨーロッパでコミュニティを変革する原動力になっている、15名の若い女性たちのストーリーをまとめたものです。

SRHRとメンタルヘルスは相互に関連しあっており、どちらも女性の人生の幼少期から認識され、対処されなければなりません。さまざまな社会において、女性の性や性に関する健康について偏見がありタブー視されるということは、性に関する保健医療サービスを利用することや、性の健康に関わるさまざまな健康状態を持って生活することが、多くの女性にとってトラウマになり得るということです。性と生殖に関する健康の問題は、性暴力と同様に、個人個人のメンタルヘルス全体に大きな影響を及ぼします。これらのことは、十分な情報にもとづいて自主的に選択をする「インフォームド・チョイス」に直接影響します。それゆえに、少女と若い女性を含むすべての女性の心身の健康と幸福を確保するためには、SRHRやメンタルヘルスに対してより統合的にアプローチすることが不可欠です。

ここで紹介するストーリーでは、15人の女性たちが、そうした重要な役割を果たす若い女性を育成することで、どのようにコミュニティで強い影響力を持つようになったのかに焦点を当てます。彼女たちが、少女や若い女性、大人の女性とかかわり経験したこと、乗り越えた課題、手にした成功、リーダーとして歩んできたそれぞれの道のりなどについて語られています。

このシリーズの各ストーリーでは、その国を象徴する花の絵が一役買っています。花はあらゆる植物の生殖器官でもあるため、性と生殖に関する健康を象徴的に表し、ストーリーの女性に関わるニュアンスを強調しています。多くの人にとって、花は喜びの源であり、それゆえに心の豊かさを呼び起こします。

ストーリーを読みながら、15人の若い女性の学びのプロセスや、日々勇気づけることを目指すリーダーたちに投資をしているYWCA運動の成果をご一緒に祝いたいと思います。世界YWCAは、若い女性への投資が、すべての人にとって、より良い、長期的かつ持続可能な変革をもたらすと信じています。

アフリカ

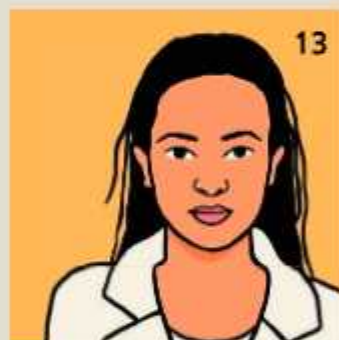
AFRICA



フェイス・サカラ
(Faith Sakala)
ザンビア



イザベル・バンディ
(Isabelle Voundi)
カメルーン



リディア・アルマウ・アラムレウ
(Almaw Alamrew)
エチオピア

アジア

ASIA



コサリナ・ヴィグナラジャ
(Kosalina Vignarajah)
スリランカ



マルラ・メイ・バエス
(Marla May Baes)
フィリピン



ナムラタ・シャルマ
(Namrata Sharma)
インド

東ヨーロッパ

EASTERN
EUROPE



アリヨナ・プリビデンツェワ
(Alyona Pryvydentseva)
ウクライナ



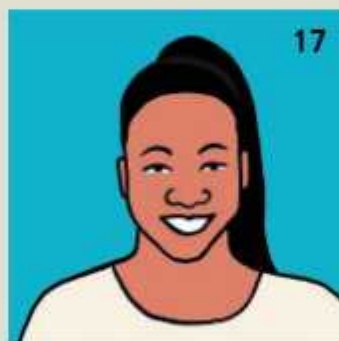
ゴハル・アスリキャン
(Gohar Aslikyan)
アルメニア



レナタ・グレンボツカヤ
(Renata Glembotskaya)
ベラルーシ



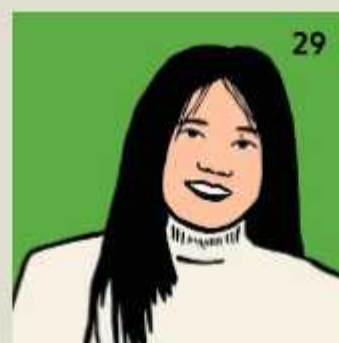
モーリーン・アティエノ・マガク
(Maureen Atieno Magak)
ケニア



マヨワ・オ・オニーオリサン
(Mayowa O. Oni-orisan)
ナイジェリア



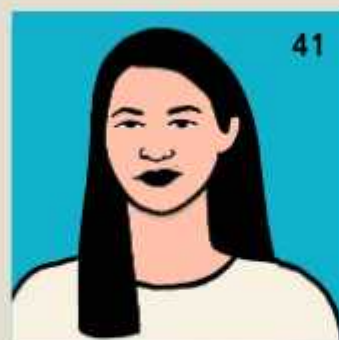
菜々子
(Nanako) 日本



ロニ・シャキヤ
(Roni Shakya)
ネパール



サシャ・ソコロワ
(Sasha Sokolova)
ベラルーシ



タナ・アリアイ
(Tana Aliaj)
アルバニア

ストーリー



AFRICA アフリカ

ブーゲンビリア(ザンビア)、アフリカンチェリー (カメルーン)、ラン (ケニア)、イエロー・トランペット (ナイジェリア)、カラー (エチオピア)



「過去に戻れるとしたら、15歳の自分に言いたいです。世界はあなたのような女性を必要としていると。」



フェイス・サカラ (Faith Sakala)

27歳

ザンビア
ルサカ

従姉妹が性的虐待を受けて支援を必要としたとき、フェイスは19歳でした。その当時、YWCAはジェンダーに基づく暴力のサバイバーへのカウンセリングを行っている唯一の組織でした。フェイスは毎日開催されるカウンセリング・プログラムに従姉妹と参加しましたが、勇気がいりました。けれども、フェイスはそこで生まれている変化を見て取ることができました。3週間後、フェイスはボランティア・メンバーになりました。

ほとんどの女性は自分が虐待の被害者となっていたことに気がつきません。虐待を否定し、「愛情を示す彼のやり方だから」と信じている女性もいます。また、虐待についてよくわかっていない女性もいます。ザンビアでは長年、ジェンダーに基づく暴力、性差別的な文化的慣習、そして女性の声の音が常に押しつぶされていることが、大きな問題です。さらに女性の貧困が、暴力をふるうパートナーから離れることを困難にしています。

YWCAのボランティアとして、フェイスは一人対一の対話、グループ・ディスカッション、啓発ワークショップ、生活スキル・トレーニングなどをするセーフ・スペースを作るためにリソースを集めました。これにより、強く支えとなる女性たちの地域コミュニティができ、進化と拡大を続けています。

フェイスの影響で若い女性たちは団結し、法的施設やシェルターへのアクセス方法を学び、希望や正義、社会復帰などの実現を目指しています。最も大事なことは、自分の子どもや自分自身の幸福のために、不幸な家庭から抜け出す権利があると信じていることができるようになったことです。

フェイスは若い女性とともに活動するうち、女性の置かれている状況を変えるには、女性の声の力が必要だと実感しました。同時に、コミュニティを動かしている人たちがその声をいかに抑圧しているかをより認識するようになりました。そこで彼女は、もっとコミュニティで影響力を持つ人々や宗教リーダーの信頼と尊敬を得ようと動きはじめました。

「男性やコミュニティのリーダーがあなたの意見に賛成しないのなら、あなたの役割は終わったとは言えません」

2020年、コロナ禍により女性への暴力は増え、女性の心身の健康に影響を及ぼしました。フェイスはすぐにソーシャルメディアを使い、国中で協力者を募りました。彼女はラジオや地元のテレビ局を最大限活用して、苦しんでいる女性に手を差し伸べ、支援を提供しました。

若いアクティビストの増加によってザンビアに良い変化が訪れ始めました。女性は自身の権利を強く主張するようになり、不利な結果をあまり恐れなくなりました。彼女たちのパートナーの多くは、今や女性の権利を認識しています。国家警察からも、YWCAは虐待のサバイバーの社会復帰を支援する組織として期待されています。けれどもこれはまだほんの始まりです。革新的な女性運動を継続するためには、より多くの活動が必要です。ザンビアはより包括的な政策とより多くのセーフ・スペースを必要としています。

「オブラ・ウィンフリー
(Oprah Winfrey) の話
は私を勇気づけます。少
女時代に性的虐待を受け
たにもかかわらず、今の
ような強い女性になった
のですから。」



イザベル・バンディ (Isabelle Voundi)

25歳

カメルーン
マルア

イザベルはカメルーンの、男子と女子を差別しない地域で育ちました。しかし、16歳の時に一家はカメルーンの北部へ転居し、カルチャー・ショックを経験しました。そこでは女子が男子に話しかけてはならず、月経時には学校を欠席しなければならず、そして13歳で結婚させられていたのです。

イザベルはその町の性差別に立ち向かうために、若い女性とその保護者のためのセーフ・スペースを確保し始めました。ジェンダーに基づく暴力、児童婚、月経に関する固定観念について話し合い、文化の違いに配慮した方法で、これらに対する考え方を変えようと懸命に活動しています。

間もなく、コミュニティの人々はイザベルを地域の女性アクティビストとして認め始めました。若い母親たちは性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights: SRHR) をより深く理解するために彼女に連絡をとり、「私たちの娘が成長してあなたのようになることを望みます」と語っています。1年後、彼女にYWCA運動に参加するように勧める人がいて、彼女はそれを受け入れました。

イザベルはYWCAの若い女性リーダーとして、セーフ・スペースで若い女性や少女との対話や、研修を促進しています。10~14歳の少女を集めて、性と生殖に関する健康や生殖器官、初潮、そして月経に対する迷信などについて説明し、理解を促進しています。また15~25歳の女性に対して、ファミリー・プランニング、メンタルヘルス、生計を立てる機会、そしてリーダーシップ・スキルを取り巻く課題に対する解決策を提案しています。

カメルーンでは、少女たちは学校を退学させられて、10代のうちに結婚させられることが多く、少女の妊娠という結果を引き起こしています。教育の欠如と、それに伴う個人の収入源の欠如により、夫に依存せざるを得ないのです。これらすべてのことが彼女たちの心身の健康に重大な影響を与えています。

「**考え方、特に両親の世代の考え方を変えることは難しいのです**」

とイザベルは嘆き、世代間対話の必要性を強調しています。

しかし、これらの状況を打破するための活動が進行しています。若い女性がスキルを身につけるために学校に通ったり、地域で起業したり、または新しい仕事を始められるような活力のあるコミュニティを築く中で、イザベルは自分の活動の影響力の大きさを実感しています。

今、地域の教師たちは、生徒がイザベルの話聞くことを望んでいます。13歳の生徒たちは、彼女のようなリーダーになることを熱望しています。若い母親たちは、女性のエンパワメントに対する彼女のたゆまぬ努力を認識しています。そしてその地域の市長は、「イザベルは今まさに花を咲かせようとしている若い女性です。彼女の才能が開花した時には、世界中の人々がその存在を知ることになるでしょう」と確信しています。

「過去に戻れるなら15歳の私に、「あなたは年齢の割に立派にやっている」と言ってあげたいです。」



リディア・アルマウ・アラムレウ (Lidya Almaw Alamrew)

29歳

エチオピア
アティス

リディアは、学校卒業後エチオピアYWCAに入会する以前は、公共の保健医療センターで医師として働いていました。常に有意義な形で自分のコミュニティに貢献したいと思っており、YWCAを通じて、若い女性に有益な機会を提供し、人権とジェンダーの公正にアクセスできるようサポートすることができました。

リディアはエチオピアYWCAで2つの役割を担っています。YWCAの若い女性リーダーとして、性と生殖に関する健康と権利(Sexual and reproductive health and rights: SRHR)に重点的に取り組んでおり、広報コミュニケーション会員増強コーディネーターとして組織のメッセージ性の強化を行っています。これらの役割において、自分のスキルと機会を活用して、若い女性の権利および利用可能なサービスについてオンラインとオフラインで若い女性と話し合っています。

エチオピアでは、社会経済的に豊かな生活から少女を除外するような固定観念が付いて回ります。家族は女性が家にとどまり家事をこなすことを期待します。そして、女の子が大学や職場に行くと、それが家族の優遇措置のように見えるのです。結婚してしまえば、夫が子どもの人数や避妊方法を決めるようになります。

リディアは、少女や若い女性が自分の身体や権利について話し合ったり、研修およびワークショップを実施するために集まれるセーフ・スペースを提供しています。彼女たちは、家族計画について学び、SRHRがメンタルヘルスに与える影響を理解し、カウンセリング・サービスを利用しています。さまざまな立場の人の交流を可能にするために、リディアは、女性の権利に対する関心を高めようと、学校やコミュニティの少年や男性に働きかけています。

リディアは、自身のアドボカシー活動や影響力により、エチオピアで自分たちのために立ち上がることをもはや恐れない女性リーダーグループを作り上げました。

彼女が特に誇りに思っているのは、キャンパスで自分たちの声を反映させた反ハラスメント方針を効果的に導入した大学生の女性グループです。

新型コロナウイルスは、既存の課題を悪化させ、新たな困難を生み出し、特に女性にとって厳しいものとなりました。職を失った女性の多くは一家の大黒柱でした。産前産後のケアなどの基本的な保健医療サービスを利用することさえできない女性もいました。こうした現実、肉体的にも感情的にも精神的にも多くの若い女性や大人の女性を苦しめました。

通常のコミュニケーションの手段が影響を受けたため、リディアは、若い女性を支援するために、既成概念にとらわれず、総合的な解決策を生み出す必要がありました。彼女はYWCAの仲間と共同で、匿名で仲間同士の会話ができる多言語のバーチャル・セーフ・スペースである「Telela」というアプリを作りました。このアプリには、緊急ホットライン、SRHRとメンタルヘルスに関する情報、医療の専門家とのチャットルームが含まれています。

リディアは、目に見える変化にモチベーションを感じています、つまり女性たちが力を発揮するようになったことです。これからも女性にとって親しみやすく、適用性のある解決策の構築を目指して取り組んでいきたいと思っています。継続的な努力とアイデアでモバイルアプリを拡充させ、エチオピアの最も取り残された地域に住む、弱い立場にいる周縁化された女性たちに手を差し伸べることを計画しています。

「私の国の若い女性たちに伝えたいです。あなたは世の中に変化をもたらすために生まれてきたのです。」



モーリーン・アティエノ・マガク (Maureen Atieno Magak)

30歳

ケニア
モンバサ

10歳のモーリーンは、生まれ故郷の村から遠く離れた町で、ひと月7米ドルにも満たない報酬で子守として働いていました。12歳になる前に父親を亡くし、養父を、そして母親までも亡くしました。何度も性的虐待を受け、嫌というほど殴られました。路上のゴミ箱から食べ物を漁ったこともありましたが、しかし彼女はこうしたことすべてを耐え抜いてきました。彼女の望みはただひとつ、学校に通うことでした。

モーリーンの体験は本当に胸が痛むものです。しかし何よりも心を動かされるのは、彼女が自分の権利のために闘い続けていることです。モーリーンが現在YWCA運動の若い女性リーダーであるという事実は、ひとりの女性が最も困難な状況にあってもここまで成し遂げることができるということの証しです。そしてそれが、彼女が大勢の、若くて立場の弱い、社会から取り残されたケニアの女性たちを力づける存在である理由です。

モーリーンが自身の体験から学んだことは、少女や若い女性たちに自分の身体、女性の権利、精神的幸福についての知識を与えることの大切さです。彼女は同じような境遇の女性たちが自己認識、自尊心、そして共感について互いに学び合えるよう手助けをしています。また、性教育を受ける場や、小規模ビジネスを立ち上げるための研修の機会を提供しています。

少女たちが幼い時期から虐待や暴力などにさらされているという現実を理解しているモーリーンは、彼女たちが自分の人生を自分自身で切り開くよう励ましています。ケニアでのジェンダーに基づく暴力(GBV)の連鎖を断ち切るための取り組みとして、モーリーンは支援グループを立ち上げました。そして秘密保持を確約し、心理的安定のために体験を分かち合う文化を育てています。

トラウマについて話をするのは難しく、またそれを心の中に持ち続けることも容易ではないことをモーリーンは理解しています。そこで彼女は独自のアプローチで少女や若い女性たちの間で女性同士の絆を育てています。その中でも人気のある活動「Artistic Fridays」では、若い女性たちや男性たちが自分たちを表現するアートに取り組んでいます。彼らは歌い、踊り、詩を朗読し、自分の感じていることを演じて、メンタルヘルスの重要性を訴えるのです。

コロナ禍では、ジェンダーに基づく暴力が問題となっていた国ではさらに状況が悪化しました。モーリーンは地域の市民社会の組織を取りまとめ、助けを必要としている女性たちを救おうと考えました。フリーダイヤルの電話相談サービス、チャットによるカウンセリング、電話会議、ビデオセッションなどを行い、ジェンダーに基づく暴力、性と生殖に関する健康と権利およびメンタルヘルスに関する情報を集めたアプリも立ち上げました。

モーリーンは女性の幸福について熱心に提唱し、自分のメンティ[1]たちがそれぞれのコミュニティで提唱者となるよう支援しています。彼女は、YWCAのおかげで自己を主張できるようになったと信じています。そして、ほかの女性たちの自己主張できるチャンスを後押ししたいと考えています。

「私は女性たちのエンパワメントを支援します。私は少年たちのエンパワメントを支援します。私は誰も見捨てません」

と彼女は言います。

そして彼女は誰も見捨てていません。彼女のプログラムはすべてのコミュニティ、すべてのジェンダーに開かれています。さまざま信仰、信条、バックグラウンドの人々と交流し、彼らが抱える心身の健康に関する課題を克服する手助けをしています。

[1] (訳注) メンティ：メンターシップを受ける側の人たち

「私の国の若い女性
たちに伝えたいで
す。問題意識を持
ち、強い決意で、勇
気をもって、目標を
達成しましょう。」



マヨワ・オ・オニーオリサン (Mayowa O. Oni-orisan)

30歳

ナイジェリア
ラコス

マヨワと2人の姉妹は、献身的に家事を切り盛りし教師としても勤めるシングルマザーに育てられました。母親はコミュニティの中でも数少ない、大きな夢を持ちそれを実行しようとする女性でした。マヨワもまた、若いころから機会均等と女性の権利の提唱者となりました。

現在YWCAは、マヨワがその活動を継続していくためにより大きな場を提供しています。彼女は若い女性や大人の女性たちのための会合、セミナー、研修、ワークショップなどを企画し、生理時の健康と衛生、生殖に関する権利、メンタルヘルスなどについて話し合いをしています。また頻繁に学者、政治家、牧師、イスラム教聖職者など、分野を超えた人々と若い女性や少女たちの話し合いの場を設け、コミュニティの意見を政策立案者たちに伝えています。

ナイジェリアでは、性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights : SRHR) はエリートのためのものと考えられています。社会から取り残された家庭の子どもたちは、親が子どものいる部屋で性行為をしたり、学校で性教育を受けられなかったりして、SRHRに関して誤った考えを持つようになります。

「私は自分の4歳の娘を見ると、娘が確実に安全で尊重されていて欲しいと思います。そして他の少女たちもそうであって欲しいと願います」

マヨワの活動はしばしば抵抗にあいます。彼女は「少女たちを墮落させ、家族の信条に背かせようとしている」と言われるのです。しかしそんなことで彼女はあきらめません。自分には、より良い明日のために少女たちの人生を変える力があると信じているからです。「変化は、ゆっくりですが起こりつつあります」

マヨワは若い女性たちに、自分自身を信じ、大学で学び、それぞれのコミュニティで自分たちの身体と権利のために声をあげるよう促しています。今では活動を支援してくれる男性の団体も出てきました。彼らは、女性は尊厳をもって扱われ、虐待されるべきではなく、女性のSRHRは尊重されなければならないことを理解しています。

コロナ禍以前は、男女間の信頼関係を築くためコミュニティ・センターや市場などを訪れていました。しかしロックダウンになり、タウンホール・ミーティングはWhatsAppでのグループチャットになりました。彼女は権利に関する対話をオンラインで主催する傍ら、女性の心身の幸福について調べ、生理用品・衛生用品を手に入れることが困難な女性たちに確実に行き渡るようにしています。

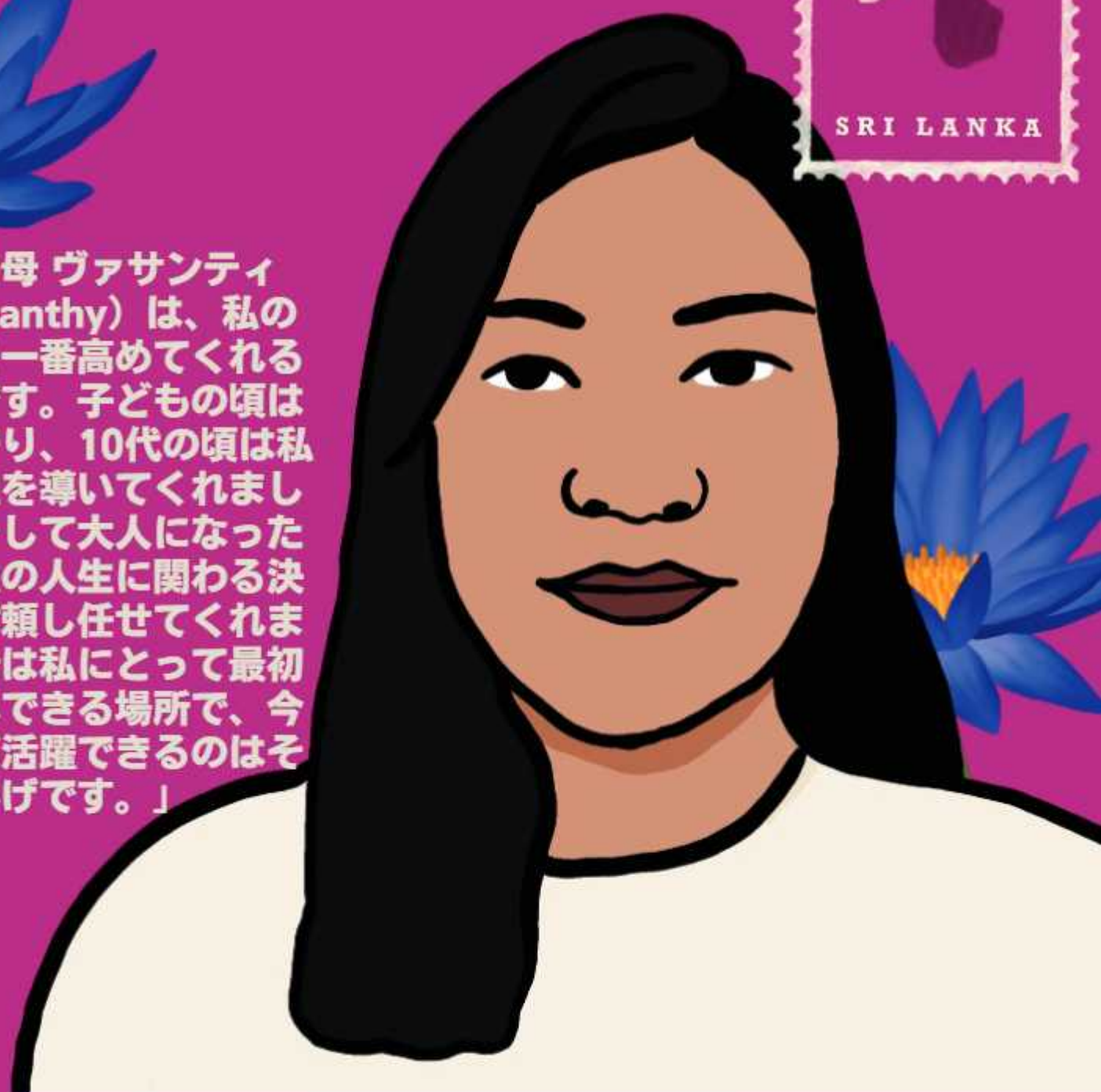
マヨワは、変革は家庭から始まると信じているので、自分の娘には身体の接触には良い接触と悪い接触があることを教えています。「SRHRについての話をするのに早すぎることも遅すぎることもありません」。彼女は、年長の世代は若い頃に権利について学ぶ機会や場がなかったため、権利に対する認識が低いことを承知しています。



シャクナゲ(ネパール)、桜(日本)、ジャスミン(フィリピン)、
ハス(インド)、ムラサキスイレン(スリランカ)



「私の母 ヴァサンティ (Vasanthi) は、私の意欲を一番高めてくれる女性です。子どもの頃は私を守り、10代の頃は私の人生を導いてくれました。そして大人になった今、私の人生に関わる決断を信頼し任せてくれます。母は私にとって最初の安心できる場所で、今自分が活躍できるのはそのおかげです。」



コサリナ・ヴィグナラジャ (Kosalina Vignarajah)

25歳

スリランカ
コロンボ

コサリナはスリランカ人の両親の元に東洋と西洋の文化が共存するレバノンで生まれましたが、より西洋の影響を受けながら生活しました。9歳で家族と共により保守的なコミュニティであるスリランカに移り住みました。内戦が終結に向かう中、インターナショナルスクールで学びながらも伝統的なコミュニティで暮らし成長しました。

高等教育を受けるために引っ越したコロンボは、溶け込みやすい開放的な雰囲気を持った国際的な都市だとコサリナは感じました。卒業後は、働く女性のためのYWCAホステルに住み、まもなく女性のためのエンパワメントとアドボカシー活動のボランティアに登録しました。

コサリナは少女や若い女性のニーズを理解するために積極的にコミュニティに溶け込みました。そして、彼女たちの性と生殖に関する健康と権利(Sexual and reproductive health rights: SRHR)の問題とそれが彼女たちのメンタルヘルスに与える影響についてすぐに気づきました。彼女たちの関心や心配事を最優先に考えて、研修や会合の実施に必要なリソースを集めました。将来のリーダーとなる人材を育てるには若い女性の能力を引き伸ばさなければならぬと考えたのです。

スリランカのコミュニティには独自の伝統や慣習が根付いています。ある地域では、初潮を迎えた少女は1ヵ月間隔離されます。また別の地域では、生理中の少女や女性は鉄を身につけなければいけません。他のほとんどのコミュニティでも、生理中の少女は寺に入ることを許されません。

コサリナは若い女性のグループが生理、性感染症、避妊、そして自分たちの身体に関する権利について安心して話し合えるセーフ・スペースを作りました。

そして、十分に文化的な配慮をしながら、有害な慣行の問題提起をしました。さらに、大人になりたての人がインターネットから、ときにはポルノグラフィから性に関する知識を得ていたことから、コサリナは有益な性教育のリソースを広めることで誤解を招くような性差別的な情報をなくす取組みを始めました。

新型コロナウイルスによるパンデミックが起こると、コサリナはすぐに手段を変更しました。ソーシャルメディアのアカウントを作ることでメンティ同士の交流を続けられるようにしたのです。また、新型コロナウイルスの認識を高めるためにインフォグラフィックをデザインしました。増え続ける児童や女性への虐待に立ち向かうため、世界YWCAの「非暴力週間」キャンペーンに参加し、若者と組んでこのメッセージを広めました。

コサリナは、オフラインやオンラインでSRHRやメンタルヘルスについての認識を高めるための会合や研修を実施しています。そこで彼女のサポートを得た多くの若い女性が自分たちの直面する問題や権利について提起する力を集結することができました。一方では、共通のソーシャルメディア・プラットフォーム「Voice of Asian Activists (アジアのアクティビストたちの声)」を使い、若い女性が地域の仲間の力や影響力を活用することができるようにしました。

コサリナは、自分を含めた多くの女性は、家族やコミュニティと権利について自由に話せるためには自分自身の壁を打ち破らなければなかったと認識しています。そして、さらに多くのセーフ・スペース、研修、リーダーシップ・スキルにより、まもなく若いスリランカ女性がエンパワーされ、自ら決定を下し充実した人生を送れるようになるでしょう。


もし時をさかのぼって
15歳の頃に戻り自分に
会えたなら言ってあげ
たいです。「未知のこ
のに対して感じる不安
は必ずしも恐れるほど
のものではない」と。



マルラ・メイ・バエス (Marla May Baes)

26歳

フィリピン
マニラ



フィンテックビジネスの開発者であり、女性の権利を守るボランティアでもある**マルラ**は、16歳の時にYWCAに入会しましたが、率先して活動を行うボランティアとなったのは23歳の時でした。そのとき彼女は目指す方向を求めて人生の目的をずっと模索していました。そして若者たちに接触する機会があり、彼らの抱える課題を理解したのでした。

フィリピンでは自分たちの精神面での問題について人前でオープンに話すことはしません。もし誰かがうつ状態にあることや心配事を抱えていることを告白すると、親戚や友人たちは「お祈りして追い払う」ことを勧めます。また性と生殖に関する権利など女性特有の問題や関心事についての会話はほとんど全くと言っていいほど避けられてしまうので、少女たちの中にはキスをすると妊娠してしまうと信じている人もいます。

若い女性リーダーおよび全国青年調整連絡会会長として、マルラは、若者の将来に向けて改革を実施する立場にあり多くの重責を担っています。彼女は若い女性たちに参加してもらった新しい方策を次々と考案しています。そして失業中のミレニアル世代の人たちがスキルを築くため、また新進の起業家たちが地元の物産品の市場を開発するため、セミナー（今はオンラインセミナー）を計画して定期的開催しています。

マルラは、地元の方言を用いてその土地の文化的な背景を交えながら簡単なわかりやすいメッセージを使い、女性の身体や権利について若い人々、特に子を持つ母親たちと交流しています。そして女性の生理に関しての古い言い伝えを正しています。またリーダーシップ育成をめざしてさまざまな対話を繰り返す中で、若い女性たちが自分自身のために立ち上がることを奨励し、誰と結婚するかを自分で決める権利について彼女たちを教育しています。

新型コロナウイルスはまた新たな一連の問題をもたらしました。フィリピン人には、コロナそのものに加えて児童婚や十代の妊娠が増えていることが目の前の課題でした。十代の若者たちが、コロナ禍とその結果起きている事態について強いストレスを感じて自殺するという話が頻りに聞かれました。このようなますます悪化する状況に対処するためマルラは段階的な改善策を計画しました。

彼女は早速自分のネットワークで若い女性や大人の女性たちに次々と連絡し、新型コロナウイルスと闘う際に必要な対処法を説明しました。また、コロナ禍によるロックダウンの状況下でもメンタルヘルスを改善するために前向きな気持ちを保つことを身につけさせるべく定期的に集会を開きました。「いかにして新型コロナウイルスに立ち向かうか」と題した集会への参加者は14,000人にも及びました。

たくさんのフィリピン人がボランティア活動に興味を示すようになりました。そしてマルラは、それが変化を生み出す絶好の機会として捉えています。

「若い女性たちのアイデアや見識がまだ活用されていないと感じます」

と彼女は言います。そしてもし若い女性たちの声がもっと届けば、この国はより包括的な政策を取るようになるだけでなく、精神的な健康の面からも今まで以上に健全な環境になるだろうと彼女は考えています。



「私の国にいる若い女性の皆さん、この国で女性や第三の性別の人たちがいかに大変な思いをしているかは理解しています。でもだからといって自分を信じることをやめないでください。そうではなく、お互い団結し尊重するように励まし合い、善と愛を広めるために声を上げるのです。」



ナムラタ・シャルマ (Namrata Sharma)

29歳

インド
ニューデリー

幼い頃、ナムラタは3人の兄や弟たちと同じように育ちました。彼女の兄弟たちは何ら優遇された扱いは受けませんでした。でも彼女が思春期を過ぎ、体つきが変わるにつれ、周りにいる家族や親類の彼女への接し方も変わり始めました。父親は彼女を大学に通わせることをためらいましたが、彼女は粘り強く押し通し、自ら入学しました。

現在ナムラタはYWCAデリーで心理カウンセリングを行っており、脆弱で虐げられたコミュニティで活動しています。彼女は、性的虐待やセクシュアルハラスメントを受けている少女や若い女性、シングルマザーや家族から見捨てられた少女や若い女性と交流しています。ナムラタは共感をもって彼女たちの話に耳を傾け、困難な状況から抜け出せるように導き、彼女たちの権利を擁護します。

コロナ禍により家庭内暴力や精神不調の報告が増え始めると、ナムラタはセクシュアルハラスメントやメンタルヘルスについてのオンラインによる会合を立ち上げ、若い女性のニーズに応えました。制度、法律、ヘルプラインを活用するために必要なリソースを分かち合うだけでなく、ナムラタは彼女たちが有意義な会話ができる信頼に基づいた関係を築きました。

社会から取り残された若い女性たちとの包括的なアプローチを通じて、ナムラタは彼女たちの味方となりました。彼女たちは、自分の娘たちをよりよく育てるにはどうしたらよいか、どのようにして年齢にあった性教育を子どもたちに与えるのか、そしてどのようにして仲間の女性たちに自分たちの権利にもっと気付いてもらえるのかを理解するために、ナムラタのところにやってきます。南アジアでは性と生理の話題は、特に少年や男性の前では公然とは話されません。「私は若い母親に生理について、娘の父親が周りにいるときに自分の娘に話すように奨励しています」とナムラタは語っています。こうすることで、少女が自分の身体に関して心配なことを安心して自由に話せる雰囲気ができます。

大家族が一般的で、伝統的な習わしが何世代にも渡って受け継がれるインドのような国では、子どもを身ごもった途端、性別による偏見が広がって行きます。ナムラタは世代間対話が女性の役割や幸福をめぐる固定観念を打ち破る一助となると感じています。このことは、治療が恥とされる家族のメンタルヘルスに取り組む際にも役に立ちます。

この3年間、ナムラタは、特に少女、若い女性、そして女性の心の健康の擁護者であり続けました。

彼女は、情報は地域社会を力づけると信じています。そして女性のニーズにもっと応えるようになり、精神的な幸福にもっと応えるようになり、若い女性ばかりでなく、地域のゲートキーパー[2]、警察官、そして政府関係者も巻き込んでいます。

ナムラタにとってYWCAに加わることは自分のキャリアにエネルギーを注ぐようなものです。彼女はそれを幸運に感じ、女性たちが社会や家族による障壁、そして精神的な障壁から自由になる手助けができる立場にしようと心に決めています。彼女は「自分の活動が大切なことの役に立っている」と信じ、「インドには自分たちの権利を擁護できる若い女性のリーダーがもっと必要です」とも述べています。

[2] (訳注) ゲートキーパー：悩んでいる若者たちを支援者につなげる役割や、プロジェクトを地域で広げる影響を持つ人たちのこと。



「もし15歳の私に会えるのであれば、精神的なことで悩んでいるのはあなただけではないよと言ってあげたいです。先生、家族、友達に相談してごらん下さい。」



菜々子 (Nanako)

25歳

日本
京都

菜々子は大学を卒業し、インターネットでボランティアの機会を探していました。そうしたところ、YWCAを見つけ、すぐにでも加入したいという気持ちになりました。彼女が大学時代に積極的に交流していたような留学生たちに、YWCAが住む場所を提供しているということが彼女の興味を引いたのです。

菜々子は日本の学生との活動に大変熱心です。彼女たちのためにリーダーシップの研修やワークショップを企画しています。若い女性たちが社会の中で正当な地位を主張できるようにするには、幼いときからリーダーシップが重要であるという認識を高め、支持することが大切だと信じています。

菜々子は若い人のニーズをすぐに受け入れ、コミュニティの現実や事例に基づいて行動しています。彼女はデジタルプラットフォームで主張することの可能性と、意識的な思考に影響を与える主流メディアの役割についての話し合いに学生たちを参加させています。彼女は、働く若い女性の職場での不満や、大学生が直面している強いストレスの問題に取り組んでいます。

コロナ禍前は、彼女は教育機関を訪れ、学生と直接コミュニケーションをとっていました。現在は、彼らのために意識向上セッションとトレーニングワークショップをオンラインで主催しています。働く若い女性と大学生の間の仲間意識を築くために、彼女はグループベースのレクリエーション活動を頻繁に企画し、そこで、彼女たちは、お気に入りの音楽、本、映画を共有しています。そして菜々子は、彼らをジェンダー・レンズで分析する機会を提供します。

菜々子は、コミュニティに根差したリーダーシップ・アプローチにより、相互交流と学び合いの雰囲気を醸成しています。

日本では、性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights: SRHR) がほとんど語られていないという事実にも関わらず、菜々子は若い女性や少女たちに、身体の変化やニーズについて話すよう強く促してきました。

世界は進歩しているように見えるかもしれませんが、平等な権利にはまだ長い道のりがあります。家庭では、若い女性は自分の身体について安心して質問をする場を見つけられません。職場の風土はほとんど性差別的です。既婚世帯では、女性が主に家事や子供の世話をするものと考えられています。しかし、これらの同じ女性たちが、自分自身の見方の変化に気づき始めているのです。

スキル、自信、知識の交換の構築に重点を置いて、菜々子は、若い女性と少女の参加が継続的に増えるよう働きかけてきました。これにより、大きな考えを持ち、夢を追い求めようとする若い意欲的な女性の集まりが生まれました。菜々子の次の目標は、日本でより多くの女性を意思決定の役割に導くことです。

「ネパールの若い女性たちに、あなたたちには自分たちの身体に起きていることを知る権利があると言いたいです。」



ロニ・シャキヤ (Roni Shakya)

24歳

ネパール
マディヤプール・ティミ

ロニは好奇心旺盛な少女で、月経や女性の身体について聞きたがりました。しかし、母親にそうした質問をすると、ほとんどのネパールの子どもたちと同じように、遮られて「結婚してからにしろ」と言われました。彼女が自分の地域の少女や若い女性たちと月経にかかわる悩みに取り組み、彼女たちの権利について教えようと決意したのはこのときです。

YWCAに参加した当初、ロニは学校や大学を中心に活動しました。彼女は性と生殖に関する健康と権利（Sexual and reproductive health and rights: SRHR）とメンタルヘルスについて学生たちと議論すると同時に、水とサニタリーボックスが整った女子学生専用のトイレを確保することを行政に働きかけました。彼女は、活動の影響が長期に持続するように、教師、親、地域住民の間での知識の交流を進めました。

何年もの間、ロニはさまざまな組織や女性団体と協力して、多様な若い女性のグループに働きかけ、その地域で、ファミリー・プランニング、避妊、安全な中絶、そして月経衛生管理についての認識を高めてきました。

ロニの仕事は楽なものではありません。同僚の若い女性リーダーの多くと同じく、地域の男性から度々口頭での嫌がらせや精神的な虐待を受けることがあります。多くの学校は、彼女が行うSRHRについての会合は不適切で子どもたちを堕落させるものだと考えているため、受け入れを拒みます。

ネパールは保守的な国で、SRHRは無視されがちです。地域によっては、チャウパディという慣習のために、生理中の少女や女性が小屋に隔離されます。生理中、彼女たちは不潔であると見なされ、家族と接触することを禁じられます。隔離中に少女が性的虐待を受けたり、窒息死させられたケースもあるといわれています。

新型コロナウイルスの流行により、ロニが活動を続けることの重要性はさらに高まりました。コロナ禍ではディスプレイに向かう時間が増えたため、ロニはそれを好機として、ソーシャルメディアやメッセージ送信プラットフォームでSRHRやメンタルヘルスについて若者向けデジタルコンテンツを定期的に提供しました。また、ネパールで少年少女が直面している新たな問題に対処するために、ネットいじめに関するコミュニケーション資料を作成しました。

この1年間、ロニは月経衛生について話し合うための意識向上セミナーや研修会を主催してきました。

彼女はメンタルヘルスの問題に取り組み、支援が必要な少女、若い女性、大人の女性たちにカウンセリングを提供しています。さらには、家族救援グッズに必ず生理用ナプキンが含まれるように行政に働きかけを行っています。

ロニは、人々が評価されることを恐れずに話しができ、意味のある形で参加ができ、そして自分たちのための決定に加わることができる安全な場と性差別のない環境がネパールには必要であることを理解しています。そして彼女は、より多くの若い女性が先頭に立ってこの運動を前進させていくことを望んでいます。



ヒナゲシ (アルバニア)、アマニ (ベラルーシ)
ヒマワリ (ウクライナ)、アネモネ (アルメニア)



もし過去に戻れるとしたら、15歳の自分にこう伝えるでしょう。「日々の一瞬一瞬で、あなた自身を信じ、愛し、敬いなさい」と。



アリヨナ・プリビデンツェワ (Alyona Pryvydentseva)

30歳

ウクライナ
キーウ

アリヨナは高校生、大学生時代にずっとさまざまな活動を率いており、後にウクライナYWCA代表と対面する機会を経て、ボランティアとしての活動を始めました。彼女は地元のコミュニティに内在する問題について理解しており、人々の性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights: SRHR) およびメンタルヘルスへの要望に応える活動を起案し実行してきました。

ウクライナの女性には、自分たちの安全と安定を確かなものにするための強い責任感と能力が備わっています。一家の大黒柱、母親、娘、妻、マネージャー、主婦など、さまざまな役割をこなす女性たちは、自らをこう表現します。「私たちはまるでスカート履いた男性のようです」と。しかし、このような役割を同時にこなすことでメンタルヘルスに度重なる負荷がかかることとなります。

インスタグラムのフォロワーが約20万人いるアリヨナは、インターネットが持つ力を強く信じるインフルエンサーです。彼女は包括的かつ協調的なアプローチを用い、女性のメンタルヘルスに対する変革的な行動を実行するために、若い世代の女性たちのスキル、自信、知識を向上させています。

彼女は、メンタルヘルスを取り巻く対話の機会を広げ、主流化するために、研修を主催し、サポートグループをうまく進め、セーフ・スペースをつくりました。若い女性による若い女性のためのこのようなバーチャルセッションは、自分自身の思いを認識し自分を愛するというメッセージを広げています。

アリヨナは、少女たちや若い女性たちと小グループやペアで活動することにより信頼関係を築き、彼女たちが誰にも批判されない環境で独自の体験を共有することができるようにしています。女性たちは、自分たちの声が届き、協力を得られるとよく知っているので、自由に心の内を話し、思いを表現することができます。

アリヨナは、女性たちの体験談を

「I Am Not Ideal. I Am Real (私は理想像ではない。私は現実にいる)」

キャンペーンで広めるために、自身が持つデジタルマーケティングの強みをソーシャルメディアのさまざまなチャンネルで活かしています。このキャンペーンは、意義のある対話をし、メンタルヘルス向上へ向けた先進的な取り組みに参画しようとしている女性たちのネットワークを築き上げることに成功しました。

ウクライナの女性たちは、心の病に関する偏見により、自身について語ることに慣れていません。しかしアリヨナの力添えによって、サポートを受ける女性たちは、家族、友人たちの前で自身が抱える心の病の問題と向き合い始め、立ち直る力を強めながら、お互いが尊重しあえる環境を育んでいます。

学校、家族、政府は、いまだに女性たちの役割を妻や母親とし、それらを果たすことが第一の責任だとみなしていると彼女は感じています。その代わりに、意味のある継続的な変革のためには、若い女性たちの教育やエンパワメントに投資し、精神的な安定に注力することが必要です。



「私の国の若い女性たちへ、今やらなければ、いつやるのでしょうか？私たちがやらなければ、誰がやるのでしょうか？」



ゴハル・アスリキャン (Gohar Aslikyan)

30歳

アルメニア
ベルダバン

ゴハルはジョージアとアゼルバイジャンの国境付近の村で育ち、自分が大きくなって地域の変革者となり、固定観念を打ち破ることになるとは想像もしていませんでした。しかし今、彼女はアルメニアYWCAの理事で、これまでに性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights: SRHR) についての研修を自国の100人以上の少女たちに行ってきました。

紛争地帯では、多くの家族が度重なる暴力と精神的ショックを受けており、そこで育った少女や若い女性たちのSRHRとメンタルヘルスは優先的に扱われることはほとんどありません。SRHRがタブーとされることや家庭内暴力は日常茶飯事で、性を選別する妊娠中絶も珍しいことではありません。また、世界的規模のパンデミックの中、若者たちはとりわけ戦争に対処する心構えが十分ではありませんでした。

不安定な環境におかれた若い女性たちのニーズに突き動かされ、ゴハルは、身体と権利について話し合えるセーフ・スペースを設けました。「会合に出席しているこの女性たちを見てみると、彼女たちの姿に自分の姿が重なりました。彼女たちが同じ問題を抱えながら大人になって、私のようになくなってしまわないかと心配でした。だから私が模範となり、誤った考え方に異論を唱えたかったです」

村の若い女性たちの多くは、固定観念や育った環境のゆえに、自分の心の健康を保つことや、友人を作り仕事を見つけること、そして自分の思い通りに生きること苦勞していました。しかし今は、自信をもって自分たちの権利と生き方を守るために闘っています。これは、ゴハルが始めた、女性の健康と生計手段を得る機会について話し合うオンライン・オフライン形式での会議の成果でした。

持続可能な変化をめざして、彼女は親や教員を話し合いに加え、さまざまなタブーについて問題を提起し、女性の健康と幸福の現在と将来に関する意見交換会には、より多くの保護者や、地域のゲートキーパーたちに参加してもらいました。

コロナ禍により、アルメニアで心理的危機が高まったのは否定できません。募る孤独感やストレス、不安に対処するため、ゴハルはYouTubeに地域料理についての動画ブログを立ち上げました。それは地元のニュース番組にも取り上げられるようになりました。さまざまな世代の女性たちに影響を及ぼし、自分の趣味を見つけるという目標を提供するのがねらいでした。

ゴハルの粘り強さのおかげで、彼女の村や隣村の少女たちの中には、インターネット上で手工芸品を売り始めた人もいました。彼女たちは自立し自分に自信が持てるようになりました。「村の女性たちが自分で決断し、役所へ出向き、自分たちの要求を詳細に説明するのを見て、私はうれしくてたまりません」

生殖に関する健康と権利は、それだけを切り離して取り組むことはできず、性に基いた総合的なアプローチが必要だとゴハルは考えています。これに関するさまざまな問題について、少年少女からデータや意見を得ることは、彼らの問題、課題に取り組む一助となります。「自分を再発見するには、支援と時間が必要だ」と彼女は確信しています。



「私のアイドルはフリーダ・カーロ（Frida Kahlo）です。彼女は健康上の問題や夫の裏切りといったあらゆる困難にもかかわらず、自分自身と革命的な理想に忠実であり続けたのです。あんなに短い生涯でも、今やとても多くの人々に賞賛される美しいレガシーを残しました。」



レナタ・グレンボツカヤ (Renata Glembotskaya)

24歳 | ベラルーシ
ヴィテブスク

レナタは18歳の時に大学の先生からベラルーシYWCAを紹介されました。彼女のボランティアとしての旅はジェンダー平等とアドボカシーのテーマから始まり、その後月経の健康や婦人科受診時の暴力、親密なパートナーからの暴力、そして性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights: SRHR) の課題の中でも特に避妊へと広がっていきました。

ベラルーシは伝統的な社会でいくつかのステレオタイプがあります。彼女の住む地域の若い女性の間には誤った情報の問題もあります。多くの女性がSRHRについて誤解していて、頻繁に緊急避妊薬を服用し、自分の排卵周期に気づかず、体毛はひどく魅力的でないと思い込んでいます。こうした考えは女性の自尊心を低くし、健康に悪影響を及ぼす一因となっています。

レナタはリーダーの役割を担い、ジェンダー平等のための長期的な研修を企画したり、性教育フェスティバルに参加したりして変化を推し進める活動をしています。ベラルーシではソーシャルメディアに人気があることから、彼女はこれに力を入れて、若者や教師、親、インフルエンサーやユースの専門家とつながり、オンライン上のセーフ・スペースを拡げました。

コロナ禍においてバーチャルミーティングへと移行する中で、レナタはプライバシーとセーフ・スペースの間の境界線をうまく引くよう舵とりをしました。SRHRとそれがメンタルヘルスへ与える影響についての会話には守秘義務が求められますが、同時に彼女は相手の話しに共感し、一方的な価値判断をしない雰囲気を作り出すために、参加者に本名を使いカメラをオンにするように促しました。

レナタの少女や若い女性、女性との経験は彼女自身の学びの旅となりました。

10代の若者たちと関わり、若い母親の悩みをより良く理解し、虐待された女性を支援するために彼女は常に学びほくし、また学んでいかなければならないのです。

レナタはこの旅で、一度ならず度々反発にも直面しました。彼女は「ベラルーシには取り組むべきもっと重要な課題があるのにジェンダーばかりに関心がいつている」と非難されました。しかしレナタは自分のしていることに自信がありましたし、女性が自分の身体を受け止め、そのニーズを認識して自分自身を第一に考えるようになるのを見て喜んでいます。

コロナ禍の間にもレナタの支援は揺るぎませんでした。彼女はたびたび産婦人科医や心理学者へのインタビューのライブ配信を設定してSRHRについて議論し、孤立を感じていた若い女性や大人の女性たちに手を差し伸べてきました。また、ソーシャルメディアを使ってSRHRに関する正確な情報を共有し、彼女たちを支援することを提唱し続けています。

レナタは変革は底辺から働きかけることが必要だと言います。人々は自身の考えや態度や行い、価値観を変える必要があります。それには正確な情報に基づいて決断し変化を持続させるためのさらなる意識の向上、研修および知識が欠かせません。彼女は「ベラルーシの未来は女性にあり、そしてそれは時間の問題だ」と信じています。



もし、過去に戻れるのなら、15歳の自分自身に言いたいです。「世間の基準に合わなくてもよい、他の女の子と競う必要もない、もっと大切なのは、他の女の子たちと団結し、またお互いに支え合うことです。」と。



サシャ・ソコロワ (Sasha Sokolova)

26歳

ベラルーシ
ミンスク

サシャにとりYWCAは、ジェンダーの権利アクティビストとしてのキャリアを築くための跳躍台としての役割を果たしてきました。彼女はこのYWCAという活動の場のおかげで、女性間の団結、そして女性が直面する諸課題に誠実に取り組む姿勢を生まれて初めて体験することができました。

女性だけの家庭で育ったサシャは自分の考えや信念を周りがサポートしてくれる環境の中で過ごしました。既に子どもの頃から、ジェンダーに対する固定概念を拒み、自分がしたいことをしていました。ですから、サシャがアクティビストになる道を選んだことは、家族にとっては驚きではありませんでした。

ベラルーシでは、政治危機によりジェンダー関連問題に取り組むことが難しくなっています。男性たちはフラストレーションを周囲の女性たちにぶつけ、その結果、女性たちは極度のトラウマに陥ったり、時には、暴力を振るわれたりしています。しかし、この状況でも性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights: SRHR) やメンタルヘルスなどを優先課題として考えることができない人々は、これらの問題を殆ど無視していません。

活動家も、現在の潮流においては、SRHRの問題、そしてSRHRとメンタルヘルスを結び付けての活動に集中することは難しいと感じています。しかしながらサシャはSRHR関連運動を広めるため、ブロガー、改革を目指す人々、そして性教育者間でのオンライン交流を推し進めています。これらの人々はそれに応え、ソーシャルメディアを積極的に活用し、その課題に関する知識を広めています。

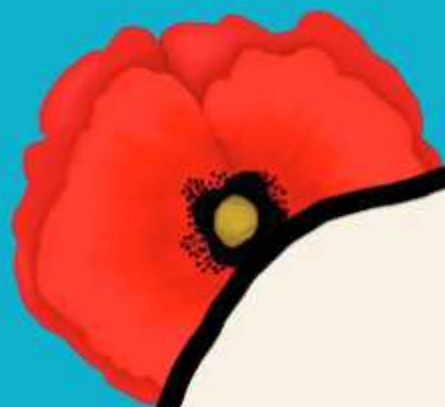
SRHRへの取り組みとして、サシャはいくつかの活動を企画しました。その一つとして、ベラルーシの数十名以上のジャーナリストに対して行った、「性的虐待およびSRHRと女性の権利についての報道の仕方についてのワークショップ」があります。

このワークショップの目的は主流メディアが、誤解を招くような、また性差別的な偏見に満ちた古くからの認識に立ち向かいながら、一般市民へ十分な情報、そして性差別のない事実に基づいた情報を提供できるように、彼らの能力を強化することでした。

SRHRに関するメッセージを広く普及するため、サシャは女性問題や女性の権利を扱っているポッドキャストであるFem FMとチームを組みました。このFem FMは、Telegram上の「フェミニスト・チャット」に携わる人々や、SRHRの啓発活動用のオリジナルチャット・ステッカーを使用する人々のコミュニティを独自に作り上げることに成功しています。サシャはこの取り組みを「Femとの協働」と呼んでいます。

あらゆる方面のアクティビストとメディアがSRHRとメンタルヘルスについての声を人々に聞いてもらおうと結束し始めています。また、ますます多くの若者も率先して活動に加わっていますが、まだ先は長い道のりです。それでも、サシャは同じコミュニティの女性たちと連携し、一歩ずつですが、前進することに力を注いでいます。

私の国の女性たちに
言いたいです。
「あなた自身、そ
してあなたの大き
な夢を信じなさい」と。



タナ・アリアイ (Tana Aliaj)

26歳

アルバニア
ティラナ

臨床心理士で大学教授でもあるタナは、常に寛容と共感が重んじられた平等のモデルともいえる家庭に育ちました。しかし、ジェンダーの権利を求める闘い、女性たちの直面する困難、タナの家族の外でまかり通っているタブーや厳格な規範は今もなお続いており、それがタナをYWCA入会へと奮い立たせました。

アルバニアでの家父長制文化は、家庭内暴力の多発、少女や女性たちの意思決定プロセスへの参画の低さ、そして常に女性を性的対象化するという実態にはっきりと反映されています。健康面においては、乳がん発症率が近年増加し、また性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights: SRHR) を何世代にもわたり無視してきたことで、多くの少女と女性たちは自分の身体と権利を理解することが難しくなっています。

YWCAにおけるタナの取り組みは、ソーシャルインクルージョン、機会均等、女性のエンパワメントなどへの自覚と能力開発に重点を置いており、これらの取り組みを現地コミュニティとの交流、研修、教育プログラムを通じて実施しています。また、SRHR関連のサービスや若い女性と女性たちのための教育・自己啓発プログラムへのアクセスを容易にしています。

タナにとり、女子学生たちと関わることは特にやりがいのあることです。彼女たちは自らの権利を認識しているため、ジェンダーに基づく差別や暴力に対してそれほど脆弱ではありません。一般の若い女性たちも心理的サポートを求めることに対してより受容的になりつつあります。タナは乳がん患者の家族に対してもガイダンスを行っています。乳がんという病気に対する認識を高めてもらい、患者の世話をする人々をサポートするためです。

コロナ禍では、多くの少女や女性たちは、教育の機会の喪失、失業、給料の減額、基本的なサービスを受けられないことに恐れを感じていました。中には家に閉じ込められ、父親、兄弟、配偶者による虐待から逃げるできない女性もいました。このような体験は、彼女たちのメンタルヘルスをより悪化させました。

タナは、SRHRおよびメンタルヘルスに対する意識の向上や、少女、若い女性、女性たちがニーズに応じた適切なサービスへ容易にアクセスできるようにすることが不可欠であると述べています。

「これらの問題はタブーとして取り扱われてはならないもので、少女、女性たちの生活の質を向上させる基本的な権利として促進していかなければなりません」

この数年、タナは若い女性や女性たちから多くの肯定的な評価を受けています。さらに彼女たちから、成功談を多数聞いており、それらが、タナにとって今後への意欲となっています。アルバニアでは、若い世代のために、文化的配慮をしたプログラムを開発する持続的で総合的な取り組みが必要であると認識されており、タナは実際にそれに取り組んでいます。



Faith



Isabelle



Lidya



Maureen



Mayowa



Kosalina



Marla



Namrata



Nanako



Roni



Alyona



Gohar



Renata



Sasha



Tana



A product of @worldywca 2021



WorldYWCA

2022年
熱き行動を
リードする女性たち



世界YWCAについて



世界YWCAは女性の権利を求めて活動する世界規模の組織です。毎年、世界各地で文化や信条を超えた何百万人もの女性、若い女性、少女たちが参画しており、人々の生活と世界を良い方向へ変革することを目指しています。100以上の国に拠点を置く私たちの運動は、草の根型で、地域社会を基盤とし、変革をもたらす女性の力に根差したものです。女性、若い女性、少女たちが自分たちの権利を守り自分たちの地域社会に影響を与えるだけでなく、仲間の女性を同様の運動へと奮い立たせるようなリーダーや変革者になれるように、サポートと機会を提供しています。女性や若い女性のリーダーたちの世代を超えた強力なネットワーク作りに取り組んでいます。その取り組みには、地域社会独自のニーズに応じて、女性と若い女性たちが主導する、女性のためのプログラムを活用しています。



世界YWCAは、もっとも取り残されたコミュニティをサポートするために草の根型のプロセスを優先し、フェミニストの、コミュニティベースの、そして世代を超えた視点からリーダーシップに取り組んでいます。若い女性が中心となり若い女性のためのプログラムを考案することにより、伝統的なリーダーシップの概念に挑み、女性たちがリーダーシップを発揮し、性別による固定観念に異議を唱え、また世界において自分たちが望む変化を起こすことが可能になります。仲間のリーダーたちと共にセーフ・スペースを作ることを通じて、若い女性たちはエンパワーされ、率直に意見を述べたり、コミュニティの人たちをリーダーシップについての先入観に立ち向かわせることができるようになりました。世界YWCAは、女性たちに、立ち上がり、自分たちの目標を達成するための力を与えることを目指し、集団的で協働的な、そして変革をもたらす女性のリーダーシップに焦点を当てています。

デザイン・グラフィック：ヴィドゥシ ヤダブ (Vidushi Yadav)

アトリビューション—非営利—改変禁止 4.0国際 (CC BY-NC-ND 4.0) www.creativecommons.org



世界YWCAのクレジット（名称、タイトル等）を表示し、かつ非営利目的であり、そして原文を改変しないことを主条件とし、再配布することができます。世界YWCA 2022年出版

この冊子は、それぞれの国の「Rise Up! Leadership」プログラムに参加したアジア太平洋地域の7人の若い女性の物語を編集したものです。その後も、彼女たちは様々な立場においてさらなるリーダーシップに挑戦し続けています。彼女たちは今も「Rise Up!」の卒業生でありYWCA リーダーであり、それぞれ独自の方法で若い女性のリーダーシップ促進に貢献しています。

世界YWCA から YWCAリーダーへの感謝：

アヌ・グルンさん Anu Gurung (ネパール)、ドゥルガー・K.Cさん Durga K.C (ネパール)、フシ・マシナ・ティエティエさん Fusi Masina Tietie (サモア)、ジェネット・イラさん Jeanette Ila (パプアニューギニア)、ニシャ・シャルマさん Nisha Sharma (インド)、サミクシャ・R.Cさん Samiksha R.C (ネパール)、ヤダナーさん Yadanar (ミャンマー)。



この冊子のストーリーは世界YWCAが協働作業によりまとめて作成したものです。インタビューと語りの内容を初稿に起こしていただいたナオミ・ウォイエングさん Naomi Woyengu (パプアニューギニア)とそれを素晴らしい最終稿に仕上げてくださいましたセルル・カーさん Serelle Carr (米国)に感謝申し上げます。これらのストーリーは、オーストラリア政府外務貿易省の資金提供による「RiseUp Young Women Leadership and Advocacy Initiative」プログラムの一環です。助成金(2020-2024年)の一部がこの冊子の作成に使われています。「The RiseUp! Mobilising Young Women's Leadership and Advocacy Program (Rise Up! プログラム)」は、アジア太平洋地域の若い女性たちが自信に満ちたリーダーとなるために必要なスキルや知識を習得し、ネットワークを築き、前向きな社会変化を起こすために自分たちの権利を主張し、共に行動するようエンパワーするプログラムです。



アクション主導の若い女性のリーダーシップ:

はじめに

若い女性と女性たちのリーダーシップの育成に投資することで、コミュニティ全体、そして世界をより良い方向に変えることができます。女性が自分たちの生活やコミュニティでリーダーや変革の造り手になろうと立ち上がれば、影響力のある主体となり、解決策を見つけ出し、身近な環境をはるかに超えた社会変革を推進することができます。

大胆で進歩的な女性運動と世界を維持するためには、若い女性のリーダーシップを中心に据えた包括的で世代を超えたアプローチが不可欠です。あらゆる年齢やバックグラウンドのリーダー間のつながり、学び合い、および相互交流を促進することで、より優れた、より影響力のあるリーダーシップモデルが作られ、私たちの運動を強化できます。

若い女性たちの声を増幅し、彼女たちのリーダーシップとアドボカシーを中心とする私たちの運動では、協働に基づき、かつ世代を超えたアプローチを意識的にとっています。

若い女性や少女たちがリーダーになると、自分たちの生活や周囲の世界をより良い方向に変える力が湧いてくることを私たちは知っています。私たちは、彼女たちが、他のコミュニティの若い女性や少女たちとつながり、リーダーになるよう働きかけることができるようなツールを提供しサポートしています。そして、ジェンダー平等と女性の権利に向けて

有意義で持続的な変化をもたらすためには、**最も疎外された人々を中心に置き、最も脆弱で過小評価されているコミュニティに影響をおよぼす問題を提唱すること**に焦点を当てる必要があります。コミュニティや国ごとにこの状況はそれぞれですが、いかなる場所においても、若い女性たち、特に非白人の女性たちや複合的なアイデンティティを持つ若い女性たちは、差別されやすいのです。それこそが、つまり最も弱い立場の人々に焦点を当てることが、すべての女性、若い女性、少女たちがエンパワーされ、安全で、差別や暴力のないより良い世界という私たちのビジョンを達成するための唯一の方法です。

アジア太平洋地域のRiseUp!プログラム・フェーズIIIでは、**アジア太平洋地域の2,200人以上の若い女性**のリーダーシップスキルが強化され、彼女たちをアクティビズムやアドボカシー活動へと繋げました。この冊子は、このプログラムの卒業生として前へ進み出したRise Up!リーダーたちのいくつかのストーリーです。フェーズIVでは、**アジア太平洋地域の9ヵ国で6,000人以上の若い女性たち**が参加して、自信に満ちたリーダーとなるために必要なスキルや知識、ネットワークを築き、前向きな社会変化を起こすために自分たちの権利を主張し、一緒にアドボカシー活動ができるようになることを目指します。

ストーリー



49

ドゥルガーKC
(Durga K.C)

ネパール



51

ジャネット・イラ
(Jeanette Ila)

バブアニューギニア



53

ニシャ・シャルマ
(Nisha Sharma)

インド



55

フシ・マシナ・ティエティエ
(Fusi Masina Tietie)

サモア



57

アヌ・グルン
(Anu Gurung)

ネパール



59

ヤダナー
(Yadnar)

ミャンマー



61

サミクシャ
(Samikusha R.C)

ネパール





ドゥルガーK.C (Durga K.C) 31歳



ネパール

ドゥルガーK.Cは、2016年、大学やコミュニティで、ファミリー・プランニング[1]と避妊の教育者として積極的な活動を開始しました。彼女の授業は「汚らしい」ものと見なされ、男子生徒からは、不愉快な気持ちにさせるようなセンシティブな質問を投げかけられ、からかわれました。彼女はカトマンズで開催されたRise Up! Trainingへ招待を受け、そこで若い女性や少女たちが直面しているさまざまなレベルの差別を認識しました。そのトレーニングは彼女に若い女性リーダーになる自信を与えたのみならず、様々なコミュニティにおいて女性や少女たちが置かれている抑圧状態の現実についての彼女の知識を深めました。彼女は、今まで伝えてきた情報が「汚らしい」ものではなく、非常に重要であることがよくわかるようになりました。以前彼女をからかった学生が、今やもっと詳しい情報や利用できるサービスについて彼女に聞きに来るようになりました。

現在、ドゥルガーは自分の仕事に自信を持っており、性と生殖に関する健康と権利 (Sexual and reproductive health and rights: SRHR) について、特にファミリー・プランニングと避妊方法について提唱し続けています。

この自信により、彼女はより効果的に、そしてより安心して仕事ができるようになりました。

ドゥルガーはアドボカシー活動が他の人々のためにだけでなく、自分たちにとっても重要であると確信しています。彼女は、自分の活動の重要性を発信していくことを、Rise Up! プログラムを通して学びました。彼女は彼女の人生や働き方に変革をもたらしてくれた、この女性たちをエンパワーするプログラムを作成したRise Up! とネパールYWCAに感謝しています。多様なコミュニティから来た自分のような若い女性たちを知るようになって、ドゥルガーは自分の意見やそれを述べる場を利用することの重要性に気が付くことができました。多くの若い女性と少女たちには、Rise Up! のような快適な環境で知識を共有し学ぶ機会がありません。若い女性と少女たちが一人もとり残されることがないように、Rise Up! はどんな場所でも参加できるものであるべきだとドゥルガーは強く思っています。ドゥルガーは現在も自身のコミュニティで、ファミリー・プランニングと避妊に関する活動を続けています。

[1] (訳注) ファミリー・プランニング: 家族計画とも訳される。特に女性の基本的な人権として、子どもを持つ数や時期を自分で決定することができること。

「Rise Up! により、私にも自分自身の意見があることに気づき、自信を取り戻すことができました。現在、私は前と同じような活動していますが、より自信をもっておこなえ、からかいや根も葉もない非難などの問題にも、より深い知識をもって対処しています。」

ドゥルガー





ジャネット・イラ (Jeanette Ila) 31歳



パプアニューギニア

ジャネットはセクシュアルハラスメントが当たり前のようなコミュニティで育ちました。

女性たちは組織ぐるみで繰り返される危険にさらされ、若者たち、特に女性たちは声を上げたり、自分たちの持っている可能性を最大限に発揮することすら妨げられています。

ジャネットは常に社会問題を意識していたものの、まさか自身がアクティビストになるとは思ってもみませんでした。変化をもたらせるほどの情報や自信を自分は持ち合わせていないと思っていたからです。

Rise Up!プログラムはジャネットにアクティビズムの世界での成功への道を開いてくれ、同世代の若い女性に積極的に働きかけることで、自分のコミュニティにどのような変化をもたらせるかを教えてくれたのです。

ジャネットは自信と尊厳をもったリーダーになることを学び、YWCAが提供するあらゆる機会を引き受け始めるようになりました。Rise Up!プログラムを通して、すぐにパプアニューギニアのコミュニティで、若い女性のリーダーシップと男女平等のピア・エドゥケーター、擁護者、推進者となりました。

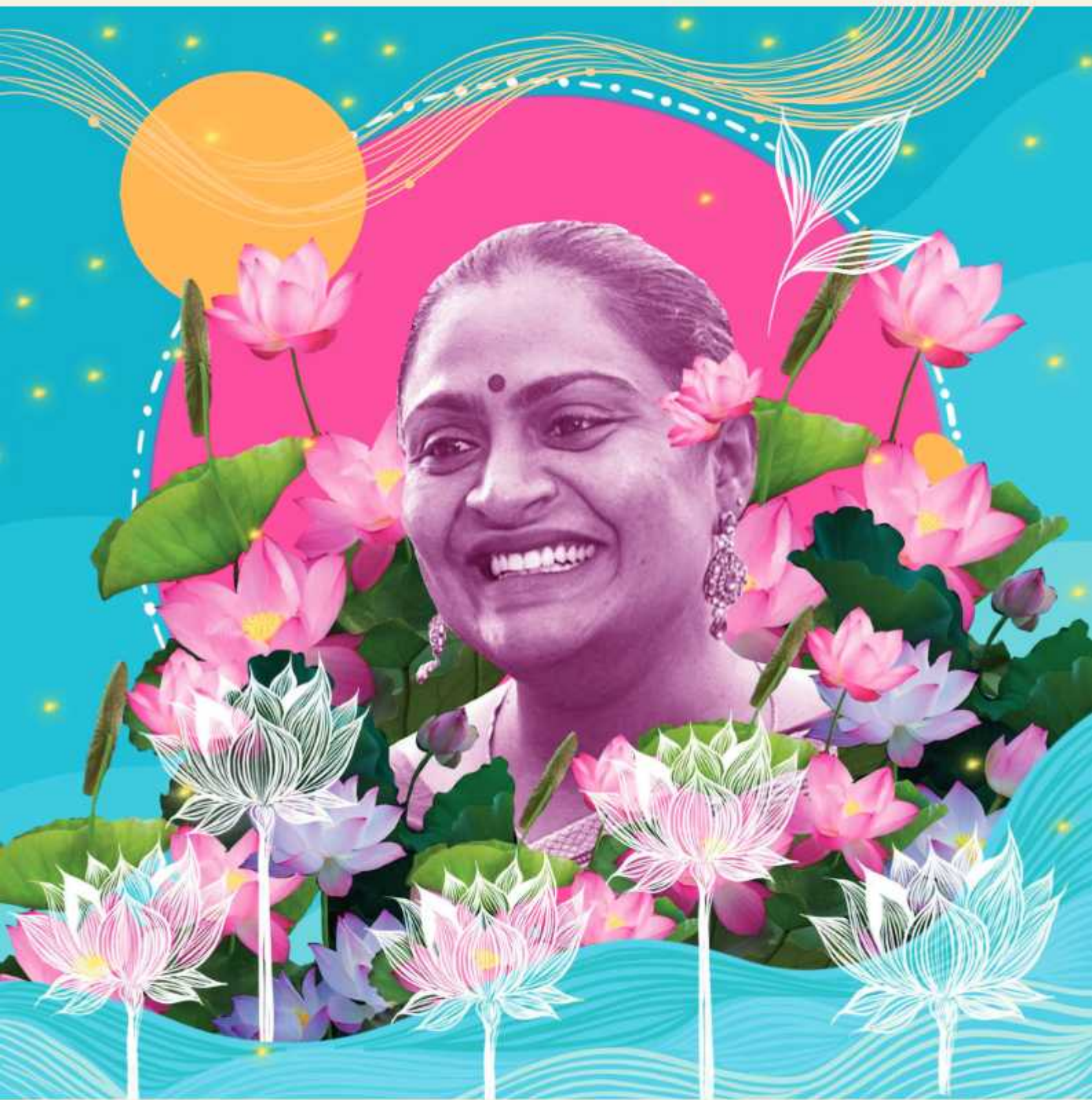
ジャネットは国連女性機関のパプアニューギニア事務所でサナップワンタイ (Sanap Wantaim(「一緒に立ち上がる」)キャンペーンを主導する活動において、Rise Up!プログラムの多種多様な要素と実践経験を組み込みました。

彼女は現在、あらゆる形の暴力をなくすために、特に公共の場を女性、若い女性、そして少女たちにとって安全な場所にすべく尽力しています。Rise Up!プログラムで得た知識は若者たちを育成し、公共の場をより安全にしていくための重要なメッセージを伝えるのに役立っています。

国内においては、ジャネットは、セクシュアルハラスメントと、公共の場や公共交通機関における女性や少女たちの安全を脅かすあらゆる形の暴力に立ち向かう力強い提唱者となっています。彼女のアドボカシー活動は仲間同士のメンタリングや、堅実な助言や励ましを与えてくれる他の女性たちと共に働くことで強化されてきました。彼女は若い女性たちが互いに高め合い、成長し合うために、心を開き、意見や考え、課題、物語を安心して共有できるようにすることに大きな役割を果たしました。

ジャネットは、自分の知識やスキルを積み上げて、同時に彼女の住むコミュニティを越えて活動し主張する機会を与えてくれたRise Up!プログラムの一員であることを誇りに思っています。リーダーシップを他の若者たちと分かち合うことで、彼らが同じような道歩み、自分たちのリーダーシップ・ストーリーを作り上げるとの思いから、彼女は若者たちと分かち合い、鼓舞し続けるのです。





ニシャ・シャルマ (Nisha Sharma) 34歳



インド

ニシャはインドYWCAに入会してユース・コーディネーターになる前は社会問題や教育の分野での活動経験はほとんどありませんでした。しかし、Rise Up! プログラムへの参加は、性と生殖に関する健康や、月経衛生の教育活動において、女性たちと共に活動したいというニシャの情熱をかきたてました。Rise Up! プログラムによって、ニシャは、自分がコミュニティに必要な変化をもたらすことができる極めて有能な若い女性であることを実感しました。そのプログラムにより、ニシャはコミュニティ・国・地域・グローバルの各レベルで、YWCA運動の内外において若い女性たちが抱える問題に対処するのに必要なスキルと自信をつけることができました。Rise Up! プログラムは、ニシャにはっきりと意見を述べエンパワーするアドボカシー活動全体に及ぶ、新たな自信という道を開いてくれました。

現在、ニシャはピラマル財団（Piramal Foundation）でプログラム・マネージャーをしていますが、そこでもRise Up! プログラムでの経験が活かされています。彼女は直に学生たちに接し、社会貢献や自己研鑽ができる職業に就く機会を与える活動をしています。Rise Up! プログラムによって、ニシャは性と生殖に関する健康と権利に関する確固とした基礎的な知識を得て、現在の労働法やドメスティック・バイオレンス法などの、インドの若い女性たちが抱える問題の現状について把握し、その問題に取り組むことができるようになりました。

ニシャは、共に活動している若い女性たちとつながるため、共感する心・聴くスキル・理解力を活用し、また教えるときに自分の経験も交えて話しています。ニシャは、僻地の村で自分とは異なる言語を話す若い女性に会った時のことをよく覚えています。

彼女と一緒に座り、彼女に自分のことを話してもらったとき、ニシャは虐待的な家庭環境で育ってきた彼女の辛さと苦勞を感じることができました。言葉の壁はありましたが、その女性はニシャが自分の話を聴いてくれて、問題についていろいろ教えてくれたことに感謝していました。この瞬間、ニシャは、自分はいくつかの問題に対応でき、このような状況にある若い女性たちの人生をより良くすることができると確信しました。

「このプログラムを通して出会った若い女性たちが成長していく姿を思い出します。このことは、私に大きなインスピレーションを与えました。この女性・若い女性たちが恐れを克服し、声をあげ、権利を主張し、家庭やコミュニティにおける変革をもたらすリーダーになっていくための活動に、自分自身をささげ、自分のベストを尽くそう、というモチベーションが生まれました」—ニシャ


ニシャは、インドの僻地の村で活動した経験をととても大切に思っています。若い女性たちをエンパワーし、彼女たちの個々の成長をサポートすることにより、多くの女性たちが虐待的な関係や他の種類の暴力から抜け出すことを助けられたと信じています。ニシャは、Rise Up! プログラムでは、自分が教えた若い女性たちが成長し、進歩していくのを見ただけではなく、Rise Up! プログラムでのさまざまな場所や状況において、リーダーシップをとれるようになった自分自身の成長も感じるすることができました。





フシ・マシナ・ティエティエ (Fusi Masina Tietie) 31歳

サモア

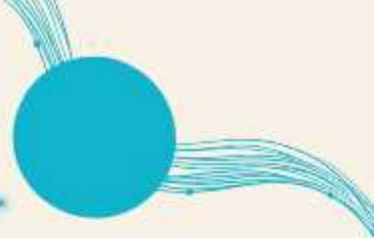


とても恥ずかしがり屋で、大勢の人前では、たとえそれが同世代であっても話すことが苦手だった**フシ・マシナ・ティエティエ**は、若い女性としてアクティビストの道を歩み始めました。ある時サモアの生まれ故郷の村で、会合の進行役を依頼されたときのことを彼女は鮮明に覚えています。そこにいた女性たちのほとんどとは顔見知りでしたが、彼女はとても緊張していました。Rise Up!プログラムに参加して、彼女は自信をもって話し、自分の知識を発揮することを学びました。彼女はRise Up!の女性たちがグループ活動で自分たちの知識や経験を気負わずに共有し合っていたのを思い出しました。そして彼女自身もその目標を必ず達成することができると確信し、意欲が高まりました。

「Rise Up!プログラムは、私自身を含めた若い女性たちの私的公的な場での権利について私が自覚し、主張できるようにエンパワーしてくれました。」—マシナ

Rise Up!はマシナの自信を強め人前で話すスキルを高めてくれました。それは現在の彼女の活動すべてを輝かせています。彼女はさまざまな地域や国際的な場でYWCAの代表を務め、またサモアの国民を代表する政府省庁での仕事を通して若い女性たちの声を広めてきました。

マシナはまた、アートやソーシャルメディアを通して、虐待にあっても社会の習わしや加害者によって声をあげることのできない若い女性たちをより手厚く擁護し導く取り組みを始めました。いかなる形であっても暴力は常態化されるべきではない、というメッセージを伝える取り組みに努力しています。また、マシナはHer Voiceプロジェクトを共同で立ち上げました。それはRise Up!とYWCAでの経験から着想を得たものです。このプロジェクトは毎月異なるひとりの女性のストーリーに焦点を当てて、サモアの若い女性たちの声を広め、また芸術活動を行う若い女性たちに共同制作の場を提供しています。



新たに得た自信を持って、マシナはニューヨークで開催された第61回国連女性の地位委員会でRise Up!プログラムとサモアの実況についてスピーチを行いました。彼女は自分の可能性、そして自分が自信に満ちた若い女性へと成長したことを実感しています。

彼女の人生の旅路のハイライトは、他の若い女性たちに出会うことであり、互いの経験や知識を分かち合うことでした。彼女はサモアのYWCAやHerVoiceプロジェクトを通じてボランティア活動を続けています。マシナが目指すのは、すべての若い女性がそれぞれの課題を克服し、人生を前に向かって進むようエンパワーすることです。それは情熱をもって取り組めば難しいことではないと彼女は信じています。若い女性たちがそれぞれの情熱を達成するのを手助けすることが自分にとっての情熱であるとマシナは感じています。

「私が今日あるのはRise Up!プログラムの賜物です。」—マシナ





アヌ・グルン (Anu Gurung) 29歳



ネパール

アヌはネパールのカトマンズ在住の前向きで情熱のある若い女性です。女性の権利のための積極的活動に情熱を持っていて、最近ソーシャルワーク分野で学位を取得し、学んだ知識を他の人と共有することがますます好きになりました。

彼女は人に話しかけるのにも苦慮するほど引っ込み思案な少女で、恐怖を感じることもあったので、自信を高め、周りの人と交流を深め、そして様々なテーマに関する知識を身に付けるため、Rise Up!に参加しました。Rise Up!プログラムへの参加を通じて、アヌは自分の考えや感情を抑え込もうとするよりも、それを人々と共有することに価値があることに気づきました。彼女は性と生殖の健康に関する権利、若い女性のリーダーシップ、そして人権といった新しいテーマを知ることになりました。そしてRise Up!プログラムへの参加を通じて、自分に自信を持てるようになり、自身の考えや知識を人々と共有する権利があるという新しい理解ができるようになりました。彼女は、こうしたスキルを様々なコミュニティで月経衛生管理、ファミリー・プランニング、そして思春期に現れる変化に対する関心を高めるボランティア活動をする際に使っています。また、ネパールの「北京会議を超えた活動委員会 (Beyond Beijing Committee (BBC))」のユース実行メンバーとして活動する傍らで、ネパールYWCAとNimble Creation Concernネパール (NCCN) の活発なピア・エデュケーターとして彼女のコミュニティに変化をもたらしてきました。

アヌは性と生殖に関する権利の知識を伝えるために、YWCAのネットワークを超えて、より広くネパール国内の教会や学校、大学カーペット工場を訪問し、若い女性や視覚障がい者とともに働きました。

Rise Up!のピア・エデュケーターとしての活動を通じて、アヌは自身の心の声気が付いた時と同じように、若い女性たちが彼女たちの心の声に気が付くようになっていくのを感じ取れるようになりました。

アヌは性と生殖の健康に関する権利についての新たな視点を得、より広い視野で見るために、これらの若い女性たちと共に活動をしています。

このプログラムを通じて、これらの若い女性たちは心を開いて、自分たちの個人的な経験や人生の目標について積極的に語るができるようになっていきます。

アヌはこのようなプロセスが重要であることを理解しています。そして、「どんな困難もあきらめず、自分の周りで起こっているあらゆる不正行為に対してもきっぱりと反対の声をあげてください。」という自分が与えたアドバイスと同じアドバイスを自分にも言い聞かせています。





ヤダナー (Yadanar)

31歳

ミャンマー

ヤダナー博士は、国連人口基金（UNFPA）のアジア太平洋地域青少年チームで働いています。その職務において、青少年の性と生殖に関する健康と権利（Sexual Reproductive Health and Rights: SRHR）、包括的性教育（Comprehensive Sexuality Education: CSE）の促進、アジア太平洋地域の若者たちに運動への有意義な参加を提唱するため、情熱をもって働いています。

Rise Up!ガイドのおかげで、彼女はSRHRの力強い提唱者となるための真の潜在能力が自分にあることを自覚しました。タイのバンコクでの能力開発やリーダーシップトレーニングで、ヤダナーのメンターは、彼女が自信を持つよう後押しし、声をあげられるように励ましてくれました。トレーニングを通して、彼女は若い女性のリーダーシップの力を知るとともに、リーダーシップ、マネージメント、自分自身の若い女性としての権利などについて理解を深めました。そしてSRHRアドボカシーや女性たちのリーダーシップを高めるための、革新的で状況に即したアプローチの方法を学びました。

ヤダナーの心を動かしたのはザンビアのルサカで行われた能力開発ワークショップで若い女性が伝えてくれたストーリーでした。少女たちにとっての安全な場所の価値を直に感じ、帰国後、彼女はミャンマー国内の若い女性と少女たちのニーズに適した安全な場所を作ろうと若い女性のためのトレーニングセンター（Young Women's Training Institute）を立ち上げました。

ヤダナーは医師としての技術とSRHRの専門知識を活かして、ミャンマー国内の紛争地域や紛争終結後の地域における若い女性のニーズにあったトレーニングプログラムを作成しました。このプログラムは、YWCA運動をこえて多くの若い女性たちに届き、SRHRや、人身売買、女性に対する暴力防止などのスキルと知識を伝え、そして女性差別撤廃条約（CEDAW）についての理解を深めることができました。

ヤダナーはRise Up!プログラムに後押しされ、アドボカシーと方針決定を通してもっと大きな規模でより多くの女性たちと連携するために国連の活動への参加を考えました。彼女はUNFPAで働くようになり、官民双方のパートナーをサポートし、質の高い包括的性教育（CSE）や若者向けの医療サービスを提供しています。更に、ミャンマー政府と協力し、CSEを学校のカリキュラムに必ず取り入れるようにし、新たな国家青少年政策のための計画（National Youth Policy Strategic Plan）の開発にも力を貸しました。

ヤダナーはYWCA内外の運動を通して若い女性たちを導き続けています。

彼女は人々と心を分かち合い、耳を傾け、可能性を信じ、夢を追いかけるのを励まし、支え、共に喜び、苦しい時もそばに寄り添います。そして、手を差し伸べ、何よりすべての人々に愛と優しさを伝えています。





サミクシャ (Samikusha R.C)

31歳



ネパール

サミクシャは、ネパールの遠隔地域で育ちました。そこでは家庭内虐待が日常的に行われていました。子どもが産めないとか、夫の要求に応えられないといった理由で、妻が肉体的、精神的に虐待を受けているのが実情です。このような女性は、自分たちの夫婦関係を上手に保てないことに対し、家族から怒りを買うのを恐れて、声を上げることができません。黙って苦しんでいるのです。

「当時は人権についてよく知りませんでした。ここネパールでは、女性は汚れたもの、不要なもので見られていることはわかっていて、そんな女性である自分を好きになれませんでした。」
—サミクシャ

女性の権利について自然に身につくように教えられないことのないコミュニティに住むサミクシャは、Rise Up!プログラムに参加して、女性であることの、そして男性と対等の権利を持つことの意味を学びました。Rise Up!で人権侵害や教育の重要性について認識を深め、大学に入学して法律を学びたいと思うようになりました。そして若い女性たちが自分たちの権利を知らないことでとても苦しんでいる実態を授業で学びました。今では、ネパール憲法や自分のコミュニティの中での不平等や法律を理解しています。そして、女性たちが直面している不公平に対して立ち上がり、声を上げることができるようになっています。

サミクシャは、女性たちが直面している暴力に対して声を上げるよう、彼女たちを励ましました。女性たちは最初のうちは怖がっていましたが、サミクシャから女性としての法的権利について教わるにつれて、家庭内暴力の体験談を語るようになりました。「女性たちのこうした変化によって、夫は妻を殴ったり

虐待したりしないように意識し、注意するようになりました」と、サミクシャは言います。彼女は、ネパールで禁止されている一夫多妻を実行している夫を持つ女性たちに、自分の受けた教育を活かして法的なアドバイスをしています。

また、サミクシャは、若い女性たちに月経の健康衛生や経済的エンパワメントについて教育する活動も行っています。現在は、ネパールYWCAのピア・エデュケーター[1]として、月経衛生管理や、その他RiseUp!で学んだ女性の権利に関する分野での行動変容のためのワークショップやトレーニングを実施しています。

Rise Up! は女性のエンパワメントに対するサミクシャの情熱に火をつけ、女性の権利問題に関する知識を与えました。彼女はそれを自分のコミュニティの問題に結び付けることができました。

彼女の受けた法学教育はこの気づきを元に積み上げられ、彼女の知識を強化しました。彼女はこのプログラムやYWCAの場で他の若い女性や少女たちと一緒にいることを楽しんでいます。他の若い女性たちから学び、かつ自分自身の体験談を話して、他の人たちにも力を与えています。

[1] (訳注) ピア・エデュケーター：同世代の仲間として、指導や教育を提供する役割。





スキャンして世界
YWCAに寄付する



日本語版 編集・発行
公益財団法人日本YWCA
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河1-8-11
東京YWCA会館302号室
Tel: (03) 3292-6121
Fax: (03) 3292-6122
office-japan@ywca.or.jp
www.ywca.or.jp